

国立民族学博物館の収藏品④1

EEM(「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」) コレクション



EEMが収集した民族資料を展示し収集活動にかかわる書簡や写真をとおしてコレクションの生い立ちを紹介する、開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへー70年万博収集資料」(開催中～平成30年5月29日)より2階の仮面コーナー。

国立民族学博物館には収蔵している標本資料の核をなすいくつもの大型コレクションが存在する。主として戦前に収集され東京大学人類学教室に収蔵されていた民族学資料、渋沢敬三がその礎を築いた文部省資料館資料(旧日本民族学会付属民族学博物館資料)、十九世紀の南太平洋の諸民族文化の集積であるジョージ・ブラウンコレクション等々、日本はもとより海外の国々でも類をみない、人間文化を研究し、後世に伝えていくべき貴重な学術資料を大切に保存、管理、活用してきた。その中の一つで、みんぱく設立に少なからぬ役割を果たしたコレクションがある。一九六八年から一九六九年にかけて世界中の諸地

域を対象として収集された「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」コレクション、通称「万博資料」である。

一九七〇年、アジアでも日本でも初となる国際博覧会が大阪で開催された。「七〇年大阪万博」である。万博の統一テーマ「人類の進歩と調和」の展示プロデューサーであった岡本太郎は、テーマ展示館として太陽の塔を設計し、その地下空間に人間の生きる根源を表すことを狙いとした展示を構想した。見る者が根源の呼び声と対話できるような環境を実現するために、展示物をむき出しにすることを決め、仮面、神像、生活用具を世界中から収集することにした。

岡本は資料の収集を、東京大学の泉靖一と京都大学の梅棹忠夫(いづれも当時)の二人の人類学者に依頼した。泉と梅棹は一九六八年の五月頃から、世界を「日本」、「韓国」、「台湾」、「東南アジア」、「インド・中近東」、「東アフリカ」、「西アフリカ」、「ヨーロッパ」、「北米」、「中南米高地帯」、「中南米アマゾン地帯」、「オセアニア」と区分した収集団の人選を行い、平均年齢三十歳あまりの大学教員や学生、新聞記者といった団員が、一九六八年九月から約一年弱の間に、四七の国や地域を訪れ、約二五〇〇点の民族資料を収集し日本に持ち帰った。限られた予算と時間の中で、自己である日本や、近代文明の象徴ともいべきヨーロッパも含めて、文化という切り口で世界を描きだすための資料収集に挑んだのである。収集団の英語名称、EXPO'70 Ethnological Missionの頭文字をとり、この収集団はEEMとよばれた。収集された資料は太陽の塔の地下では、仮面は天井から吊り下げられ、神像は支柱に取りつけて立てられ、生産用具や生活用具は棚におかれるようにして展示された。地域や民族文化の脈絡のない展示はそれほど観衆の印象には残らなかったようである。

梅棹をはじめ収集にたずさわったものたちの想いは、堅実な調査や研究にもとづく知見や成果を通じて人間文化を一般社会や研究者に精確に伝えることのできる研究博物館を築くことであった。

世界的に見てもEEMほどの規模をもった民族資料の収集はないように思われる。ただし、それは収集旅行の域を超えてはいなかった。EEMに欠けていたこと、それは、収集する対象についての堅実な研究、そして、EEMが収集に赴けなかった地域を含む世界全体を網羅した研究と収集であった。この新たなミッションのために、研究者たちは、みんぱく設立という次なる一手を打ったのかもしれない。(野林厚志)